

「岩の上に、ちよこんと置いてあるだけですわ」。舞台を支える柱の、足元の話である。木澤善和さんは、なんでもないことのように言う。社寺建築・木澤工務店。太郎坊宮の大普請を担う、宮大工の会社だ。

社歴の史料をさかのばれば、少なくとも二百六十年。いまの社長で七代目になる。太郎坊宮との縁は昭和四十五年、先代の村田宮司の時代に始まった。以来半世紀、鳥居や屋根の修繕を重ねてきた。本殿の屋根の葺き替えは村田宮司の「最後の事業」となり、その完成を見ることなく世を去っている。

舞台の工法は「懸造（かけづくり）。柱と貫（ぬき）を組み、斜面に床を張り出す工法だ。清水寺の舞台も同じで、木澤工務店は平成の大改修でその工事にも携わった。それでも太郎坊宮は難しいという。上のスペースがない。絶壁みたいなところから」。長い床板に梁材。クレーンは入らず、あの狭い参道を台車と人の手で担ぎ上げることになる。

大正十二年の記録誌は、この舞台を「岩層ニ支柱ヲ配シ、堂々トシテ建ツ」と書き留めている。以来百四十六年、舞台は落ちていない。なぜ持ちこたえたのか。「あの舞台は、あの場所に合ってるんです。どうもならんよう

第三回

「舞台を支える天狗たち」

阿賀神社（太郎坊宮）登録有形文化財修復委員会

天狗たちの大普請

に「できてる」。令和の名工から、名も知らぬ明治の大工たちへ、最上級の讃辞だと思った。凶面は残っていない。「昔は、大工の頭の中ですわ」。コンクリートをはがすまで、柱がどこまで傷んでいるかも分からない。見積書には「ばらしてから精査する」と一行が添えてある。傷んだところだけを切り、仕口（しくち）という組み手で新しい木を継ぐ。古い木と新しい木が、そうしてつながっていく。

「木造はね、七十年、八十年たった頃からが良くなるんです」。木がしっかりと落ち着いてくる。三十年ごとに手を入れれば、この舞台はまだまだ生きる。「きちっとお守りいただけるのが一番。ひどうなる前に、手を入れることですわ」。

今年、二十歳前後の若者が四人、この会社の門をくぐった。三十年後の舞台を支えるのは、彼らかもしれない。天狗の山へ、職人たちが向かう。この冬、私たち自身も、その普請に加われる仕組みが始まる。



社寺建築・木澤工務店／木澤喜和さん